



「全体は部分の総和を超える」

澤井石油商事(株) 常務取締役

留萌商工会議所青年部 会長 澤井篤司

平成3年春、留萌商工会議所青年部が発足して今年で12年。青年部の今までを国内経済の年譜と重ね合わせてみたとき些か感慨深いものがある。会の発足時、国内経済は絶頂期にあり、明るい未来像を描き現在の経済繁栄を謳歌するという社会環境があった。しかしその頃をピークとし、日本経済の歯車は逆に回転し始めた。経済環境をとってみれば正に下降曲線上を背景としたなか青年部の歴史がスタートし現在に至っているとって過言ではない。

その間、現在の景気低迷は経済成長の過渡期であるという認識と、成長経済は完全に終止符を打ったとする相容れぬふたつの認識が交錯するなか”自企業の発展を通して地域社会に貢献する”を青年部の本懐とする研修事業・自己研鑽が積み上げられてきた。終点の見えない経済環境悪化のなかで、絶えざる自己否定が成長の糧であり、前例踏襲の危うさから認識の刷新を共有できたことは大きな収穫であった。社会・経済環境全てが一斉に収縮するなかで、多種多方面に見る改善の芽を敏感に感じることができる環境は、逆に類い希な環境とは言えまいか。確かに戦後の高度成長期にはなかった沈降経済下ではあるが、今盛んに言われている効率行政をスローガンとした市町村合併・道州制も言わば中央集権を謳った「廃藩置県」以前の地方にとっては自主自立の当然のあり方であったし、未曾有の危機と言われるデフレも近代では明治の松方デフレをはじめ過去に幾度も克服している事項でもある。繁栄の土台には必ず経済的・道徳的な合理性があり、個人を超えた集合体の連携によって成されていることを過去から学ぶことができる。地方になればなるほど中央からの経済政策は疎となるが故に、個の繋がり・企業間の発展的関係が地域発展の鍵となる。

設立当初28名だった会員も現在では45名を数えた。組織の活性化は地域発展に有機的に結びつく。共に学び、語り合う仲間として多くの入会を歓迎したい。会員交流のなかで自己を客観的に測ることができ、日常とは違った環境から学び取ることは非常に多い。幅広い知識の習得は能動的な参加から生まれ、各々の自己研鑽が組織をまた成長させていく。組織のエネルギーは個人の力量の総和を超えるものであり、組織は自己の可能性を広げるためにあるべきものだからである。

2003. 10. 26